

第 94 回 関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 例会

XCIV Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai

開催日：2015 年 12 月 5 日 (土) 10:30 - 12:30

Fecha y hora: sábado, 5 de diciembre de 2015, de 10:30 a 12:30

開催場所：関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア) 1002 教室

Lugar: Universidad Kwansei Gakuin, Campus de Umeda "K.G. Hub Square", Aula 1002

担当者：横山友里、岡見友里江

Encargadas: Yuri Yokoyama, Yurie Okami

「日本の大学におけるスペイン語教育の制度的条件と環境(7) -スペイン語教育の意義再考」  
“**Condiciones institucionales y situación en el aula para la enseñanza universitaria de español en  
Japón: Reconsideración del valor de la enseñanza del español**”

本ワークショップ発表は「日本の大学におけるスペイン語教育の制度的条件と環境」の第 7 回目である。具体的には「スペイン語教育の意義再考」という観点から、①相互文化的コミュニケーションの重要性、②各大学 HP 掲載のスペイン語教育と英語教育の重要性の比較、③前項で考察したスペイン語教育の重要性と実際の大学におけるスペイン語教育制度の比較、④実際の学生の意識（動機づけ）、⑤まとめと今後に向けて、について発表を行った。

①について、まずスペイン語教育に関わる教師として、「なぜ自分はスペイン語を教えるのか」という問いを常に持ち、教育目標を言語の技能習得ではなく相互文化的コミュニケーション（自分の文化を相対化し、円滑なコミュニケーションを他の文化や行動様式、価値観を持つ人々で行う）に置くという視点の重要性が報告された。

②については、英語は世界の国際語であることが一番の強みであるのに対し、スペイン語は多様な文化性、独自の文化や歴史などが重要であると各大学において考えられていることが明らかになった。

③においては、言語教育と地域理解を軸にした制度が多く大学の存在していること、政治・経済・文化面でのスペイン語の重要性は、高度で専門的な実務能力をつけさせたいという大学側の制度と結びついていること、スペイン語圏の国が数多く存在している事実は、授業の多元化を充実させることにつながることで、異文化相互理解は、「文化が異なる人々」との理解という意味に制度上ではとどまっていること、国際社会という枠組みで考える場合、スペイン語話者が多い事実は大学制度上強みを持つこと、外国語を学習する＝知識をつけるという図式が教養教育の枠組みの中で生じている可能性があることが分かった。

④では、非専攻のスペイン語選択の学生に質問紙調査を行った。前述の各大学の HP におけるスペイン語教育の重要性を質問項目に設定し、どの程度の動機づけが見られるかを分析した。結果は、動機づけになっていないものは、EU 内でスペインが占める重要性、スペイン語が国連公用語であること、イタリア語、ポルトガル語などの似た言語が数多く存在していること、スペイン語圏の多様な社会や歴史などであった。逆に動機づけになっていたものは、スペイン語が 20 以上の国や地域で話されていること、話者が 3 億以上いること、多様な文化（美術、音楽、建築、サッカー、etc.）という項目であった。このことから、国際社会への貢献、知識・教養という動機は低く、個々の興味や利益、語学を学ぶことに伴

う実利的な側面が動機になっていることが分かった。

⑤の結論においては、スペイン語は、汎用性、将来性、重要性という視点が強調されすぎているが、相互文化的コミュニケーション能力（異文化間コミュニケーション）、つまり文化の境界線を越えて意味の共同体を形成する能力を強調すべきであり、そのためには知識としてのスペイン語、つまり大文字の **Culture** とされる地域理解のような内容だけにとどまらず、小文字の **culture** を基盤とし、コンテキストを踏まえたコミュニケーションを重視した教育を展開する必要性が示唆された。

次にこの発表を踏まえ、参加者で討論を行った。参加者から出た意見は以下のとおりである。相互文化的コミュニケーションの重要性を踏まえて、具体的にどのように普通の教育に生かしていくかが問題であること、大学側の意図と教師の希望をどのように考えていくか、外発的動機だけでは、その後やる気を失う学生が多いことの経験の共有、また、具体的な授業の手法として、学生のアウトプットの機会を多く設けて、文化の話も絡めながら授業を行うことの提案、文化を授業題材としてスペインで出版されたテキスト(**Nuevo Prisma**)で文化を教え、自分たちとの違いを気づかせる授業の経験などが話し合われた。これらを通して、文化とは何かという問いは、スペイン語教師として、常に考えていかなければならない問いであることが再確認された。

(報告者：横山友里)